第４５会大会　２０１２．８．８～８．９

会場；国立オリンピック記念青少年総合センター

８月８日（水曜日）

開会式　研究会会長挨拶、大会オリエンテーション

【１０：３０～１２：１０】

１－Ａ「聴覚障害児の評価と指導」　東京学芸大学　濱田　豊彦

聞こえない事がもたらす発達上の課題を「言語獲得」と「社会性」に整理して、聞こえない子ども達の指導で大切にしてほしいことのポイントを概説します。その上で、聞こえにくさの程度を示すオージオグラムの読み取り方や、聴覚障害児の言語力の見立ての観点についてわかりやすく解説します。日々聞こえない子ども達の指導で苦労している先生方に是非聞いていただきたい講義です。

１－Ｂ「吃音指導の実際」　金沢大学　小林　宏明
横浜市立八景小学校　吉田　麻依

「吃音がある子どもの『指導』ってどんなことをしたらいいの？」「音読指導って必要なの？」「遊びの指導では何を目指しているの？」「グループ指導は行った方がいいの？」など、吃音がある子どもの指導を始めて間もない先生方が抱きやすい疑問や悩みについて、吃音の指導・支援に関する研究動向や、通級指導教室での教育実践報告に基づきながら、参加された先生方と一緒に考えたいと思います。

１－Ｃ「からだ・こころ・コミュニケーション・ことばー私の言語障害児教育観」
東京学芸大学名誉教授　谷　俊治

耳鼻科医として言語臨床に携わるようになって半世紀が過ぎました。この間、医学部付属病院での音声外来、教育学部での臨床授業や教育相談、知的障害者(児)施設でのカウンセリングなどを経験し、多岐にわたる事例から多くのことを学ぶことができました。これらの経験と研究の成果を基に、多少の学問的意味づけを加えて、言語障害児教育についての私見を述べさせていただきます。

【１３：２０～１５：００】

２－Ａ「言語発達遅滞の評価と指導」　東京学芸大学　藤野　博

言語発達遅滞には、自閉症スペクトラム障害（ASD）を背景とする場合や、音声言語のみに問題を示す特異的言語発達障害（SLI）などいくつかのタイプがあります。また語用性言語障害（PLI）という概念も近年注目されています。本講義では言語発達遅滞のタイプを判断する方法、語彙・統語・語用などの領域ごとに言語発達をアセスメントする方法や、具体的な指導の方法・教材例などについて、最新の情報も交えながら基礎から解説します。

２－Ｂ「聴覚障害児の指導の実際」　横浜国立大学　舞園　恭子

通常の学校に在籍する難聴のある児童生徒について、初期評価の観点や個別指導計画の長期・短期の目標の立て方、指導プログラムの流れを、実際の指導事例を紹介しながら述べたいと考えます。また、難聴児のコミュニケーション能力を育てる上で支援のポイントとなる、聴覚活用の発達を促す指導方法について、発達段階に沿って具体的に述べるとともに、「聞く・話す」力を「読む・書く」力につなげる支援方法について述べたいと考えます。

２－Ｃ「WISC-Ⅲの解釈と活用及びWISC-Ⅳの紹介」　船橋市立三咲小学校　大山　恭子

発達障害を持つ子どもに対して効果的な支援を行うためには、行動観察や検査等による適切な実態把握が不可欠です。そこで、WISC-Ⅲの検査結果の解釈の仕方を学び、得意な認知能力を活用した具体的な支援の方法を、ＬＤを持つ子どもの支援を中心に紹介いたします。また、WISC-ⅣについてWISC-Ⅲとの違いを確認しながら紹介いたします。

【１５：２０～１７：００】

３－Ａ「吃音の基礎知識と新たな視点」　東京学芸大学　伊藤　友彦

この講義では、吃音の基礎知識と最新の知見をわかりやすく紹介し、これまでの研究成果をふまえた指導、支援のあり方について述べます。最近の仮説の中に、初期の吃音は統語知識（単語をつないで文をつくる知識）の獲得との関係で発生するが、進展した段階の吃音は単語自体の産出が困難となるという仮説があります。今回はこの仮説を紹介するとともに、この仮説と関係する我が国の吃音研究の新しい知見を紹介します。

３－Ｂ「言語発達遅滞の指導の実際」　東京学芸大学　大伴　潔

本講座では、「語いを育てる」「文を構成する」「文章で表現する」「効果的に伝える」といった言語領域の発達過程を概観しながら、適切な支援目標の立案と、興味を持たせる課題を通した支援について考えていきます。言語評価法の例として「ＬＣスケール」を取り上げ、目標設定のあり方を考えるとともに、言語発達支援の効果的なアプローチについて検討します。

３－Ｃ「構音障害児の評価と指導」　　元･西東京市立保谷小学校　中 村　勝 則

正しい発音のベースは、巧みに動く口(発語器官)と正しい音を聞き分ける耳(聴覚能力)です。この二つの力が協働しながら正しい発音を獲得し、使いこなしていきます。発音を改善するということは、この二つの力がどのように育っているか評価し、その評価に応じた指導を組み立てていくということです。この指導過程を、口作り、耳作り、音作りの三つの領域に分け、具体的な教材･教具を紹介します。

８月９日（木曜日）

【９：１５～１０：５５】

４－Ａ「事例検討会～保護者支援を中心に」　　東京学芸大学名誉教授　谷　俊 治

言語障害児教育を効果的にすすめるためには、子どもに対する直接的な支援だけでなく、保護者に対する支援も重要な役割を占めています。教育関係者から提供された事例をもとに、特に家庭でどのような配慮が必要なのか、会場の皆様と討議したいと考えています。事前に事務局宛に事例をお送りいただいても結構ですし、当日会場で発表していただくことも大いに歓迎いたします。

４－Ｂ「側音化構音･口蓋化構音の指導Ⅰ～歪み音の理解と聞き取り」
昭和大学歯学部口腔リハビリテーション科　山下　夕香里

側音化構音や口蓋化構音は歪み音なので慣れていないと聞き取りが難しく､実際の指導で悩まれる先生方が多いのが現状です｡いろいろなお子さんの発音の動画を見ていただき、聞き取りのポイントや舌の動きの観察方法についてお話ししたいと思います。はじめての先生方も是非ご参加ください。

４－Ｃ「事例検討の意義と進め方」　　有明教育藝術短期大学　羽 田　紘 一

言語障害児に現在行っている指導が、対象児童のニーズに応じた内容･方法で計画され、教育効果が上っているか否かの検証は重要なことです。その検証のないままの指導は､時間の無駄にもなります。検証方法としては、「事例検討･事例研究｣を定期的に行なうことが有効です。この講座では、『短縮事例法』という実施しやすい手法を紹介するとともに､演者が提示する事例を用いて“短縮事例法の実際”を体験していただきます。

【１１：１０～１２：５０】

５－Ａ「ことばの育ちと子どもの育ち」　　國學院大學　野 本　茂 夫

本講座では、幼児のことばの指導方法を中心に取り上げます。事例を通してことばの発達が幼児と保護者との関係を中心とする人間関係と関わりが強いことを確かめ、幼児期のことばの獲得が、総合的な子どもの育　ちの中でとらえていく視点が重要であることを考察していきます。そして、子どものことばの育ちは、人が育つ基礎・基本を培うことと深くかかわっていることを確認しながら、幼児期のことばの指導のあり方を考えます。

５－Ｂ「側音化構音･口蓋化構音の指導Ⅱ～舌を平らにする方法」
昭和大学歯学部口腔リハビリテーション科　山下　夕香里

側音化構音や口蓋化構音のお子さんは、発音時に舌の奥がもりあがり、舌の前も細長く緊張します｡そこで音の指導の前に、舌を平らに保つこと､舌の横の感覚や舌先のコントロール性を高める指導を行います｡お口の体操をさらにすすめた舌のトレーニング法を紹介しますので、実際に体験していただきたいと思います。鏡、舌圧子、ストローなどをご用意ください。一緒に練習しましょう。

５－Ｃ「検査法の活用－樹木画テストの導入と利用」　　國學院大學　石 川　清 明

コミュニケーションに障がいのある子どもの指導で、最近注目を集めている検査法の一つである「描画テスト」から樹木画を取り上げ、これから指導に取り入れてみたいと考えている先生方を対象に、実施法の基礎的事項や結果の解釈に必要な基礎知識について解説します。また、あまり目にすることのない障がいのない幼児の描く樹木画に関するデータを紹介し、活用の方向性と限界について考えます。鉛筆(4B程度の)と消しゴムを持ってご参加ください。

大 会 講 演　【１４：００～１６：１０】

講 師　　山口 創　（桜美林大学）
演 題　　「子供の『脳』は肌にある」

私たちの心と体は密接な関係にあります。心はその器となる体に支えられています。ですから、まずは柔軟で、そして自分自身の一部として感じられる体を育まなければなりません。また体のなかでも特に皮膚は脳と近い関係にあり、皮膚に触れる「ふれあい」は、子どもの心に大きな影響を与えます。本講演では、特に皮膚や「ふれあい」の大切さについて紹介し、そこから言葉の問題との関係について考えてみたいと思います。

講師略歴
1967年静岡県生まれ。早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程修了。専攻は、臨床心理学・身体心理学。現在は桜美林大学心理･教育学系准教授。臨床発達心理士。

著書
『愛撫・人の心に触れる力』(NHKブックス)『からだとこころのコリをほぐそう』『よくわかる臨床心理学』(川島書店)､『子供の「脳」は肌にある』(光文社新書)『皮膚感覚の不思議』(講談社ブルーバックス)　など

論文
『乳幼児期の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響』　など